

昨年末に近いころ、迎えに行くから 11 月 30 日にキングサーモンまで出掛けてくれ、という連絡があった。連絡をくれたのは、霧ヶ峰姫木平でペンションを経営する福島くんである。「今回は山歩きはしません」と付け加えて電話の向こうで笑っていた。キングサーモンからの誘いがあるときは「山歩きをしよう」と呼びかけられることが多かったのだ。

このキングサーモンを拠点にした高校の山岳部の仲間とその周辺の人たち数人の集まりに、私も参加させてもらってきた。10 年以上も続いているその集まりでは、雪の原をスノーシューで歩いたり、モミジの山をそぞろ歩きをしたりしている。会の名前はいつ決めたのか分からなくなっているが『小野先生と歩く会』と言っているようだ。つまり彼らは六十年昔の山岳部員であり、私はその山岳部の顧問であったのだ。そして当時美青年であった私は、米寿を迎え老醜をさらしている。美少年であった彼らも高校卒業後 60 年近くが過ぎて、老醜とまではいかななくても十分に貫禄のある顔つきになって来ている。

「今回は歩かない」会だと言う。そして私の米寿を祝ってくれるのだと言う。同時にこれを機会に同じ学年の山岳部員 6 人全員が集まって若かりし頃の思い出を語り合おうという目論見らしい。

その 6 人の部員のうちの一人がこのペンションのオーナー福島くんである。彼が気安く集まることができる場所を提供してくれている。そして県外に住んでいる上条くん一人を除いたあとの 5 人は「終のすみか」を長野県内に決めていているらしい。というよりは生まれ育った家に戻っている場合が多いようだ。だから「時々集まってみようや」となり、集まれば「少し歩いてみるか」ということになりやすかったのだ。

今回の会はそんな山歩きの会の延長のようでもあるが一味も二味も違う会になりそうである。というのは、県内に住む五人は顔を合わせる機会を持っている。然し離れて住む上条くんとは卒業以来一回も会ったことがないというメンバーもいるらしい。全員が一堂に会するまたとない機会を作ってもらったのだ。そして当時の山岳部員 6 人だけで集まることになっている。

11 月 30 日午後、真岡くんが遠方から参加の上条くんを連れて木曾福島から車できて、更に私を乗付けてキングサーモンに向かってくれた。ペンションに着いて見ると既に西村くんが藤松くんを連れてきて私達を待っていてくれた。あとの一人百瀬くんはどうなったのだろうか。百瀬くんは西村くんと約束した待ち合わせ場所に現れなかったというのだ。しばらくしてやっと事情が分かった。電話での約束の場所が二様に解釈できる言い方だったことに、電話をした西村くんも話を受けた百瀬くんも気が付かないで、違う場所で相手の来るのを長い時間待っていたらしいのだ。それが悲劇を生む原因になったらしい。「悲劇」とはいかにも大げさだが卒業以来 50 年も合うことのなかった仲間が行き合う機会を失ったということは、小さいだろうがやはり喜劇ではなくて悲劇に近い事件であり、残念無念としか言いようがない。

この 6 人、名前が出てきた順に確認する。福島資剛・真岡俊行・上條剛彦・西村清亮・藤松勇郎・百瀬晃、この 6 人で当時の山岳部三年生の全員である。メンバーが揃っていた。体力も気力もそして気持ちの良さも、である。部活動へののめり込み方も強かったと言っているだろう。その延長上のことであろう、西村くんは現在深志高校山岳部 OB 会の会長である。彼らは新制高校の卒業回数で言えば 15 回生である。(西村くんは一年休学して 16 回卒)。ここからは卒業年度を使って話を進めたい。

彼らが部に参加していた頃の山岳部と私は、大きな事故の余韻を引きずっていた。彼らの4学年前、11回卒になるはずだった山岳部員 本山哲(サツ)君 が北アルプス横尾で濁流に吞まれて亡くなっているのだ。山岳部として行動していた時である。私がまだ山のことは殆ど知らない新人顧問として付き添っていた時のことである。

遭難のあった年の年末を私は雪の降り積もった上高地で迎えた。大晦日の夜は釜トンネル入り口にある中の湯に泊めてもらった。移転する前の川沿いの温泉である。一人で雪の降りしきる露天風呂に浸かりながら亡くなった本山くんのことを考えていた。

当時学校では遭難者を出した山岳部に対する風当たりが厳しかった。部活動を停止するのが当然であるという雰囲気であった。私はこのまま引き下がったのでは生徒諸君に申し訳がないと思っていた。この学校職員の雰囲気を作ったのは私である。山に登りたいと考える生徒の気持ちはごく自然なものであり大切なものだ。この気持を潰したら生徒自身を潰すことになることがあるかも知れない。私は沈み込みそうな自分の気持ちを奮い立たそうと思った。

まず、私の山の實力の無さが先生方の不信の根底にあるだろう。私の實力アップをはかること。山の名前・高山植物の名前を覚え、天気図を書き、山での食事のカロリーを計算し、入山前の健康診断を実施してそのデータを把握する。私自身が勉強をすると同時に生徒にも要求した。13回卒の尾日向くんという男がいた。私が山を歩きながら覚えたばかりの花の名前を四つ五つ教えてやった。ところが次の山登りのときから花の名前は、尾日向くんが私に教えてくれるようになった。彼は数ヶ月の間に植物図鑑一冊を暗記してきたと言っていた。

遭難があったのは11回卒生。12回卒生達には満足できるような活動をさせてやることは出来なかった。この学年のときだったと思う。私は現役の山岳部員と山岳部OB、そして顧問の私との関係を決定的に変えようと考えた。合宿指導のために涸沢まで登ってきてくれたOBにそのまま帰ってもらった。深夜に涸沢から上高地まで下ってくれるように頼み込んだのだ。私が直接には話をしたこともないOBとの関係を絶って、現役の部員と顧問とで部を作りなおすことを目指したのだ。OBから怒りの声が上がっただろうが、幸いなことにその声を私に届けてくれるパイプはなかった。

12回卒の連中も頑張ってくれたが、一番大変だったのは13回卒の尾日向・高柳・吉江・有田などであったと思う。毎日城山まで駆け上がる訓練が当たり前であった。山行計画書は入念に作られ食糧計画だけで数ページがガリ版刷りで作られた。そんな生徒の毎日の行動が先生方を納得させたのだと思う。職員会に提出した山行計画には温かい支援の雰囲気を感じることができるようになっていった。

こんなことを長々と書いたのには理由がある。昨年、13回卒の高柳くんと会って話をしていた時、彼から15回卒の諸君(今回集まってくれた諸君)が、いってみれば自由気ままに難しい山に登り、無茶と思われるような行動をしている、そんなことが許されたのだろうか。不思議だ。理解できない。という意味の発言があったのだ。

実は私自身も不思議な変化だ、よく分からないと思ったことがあった。肩イカラセテどこからも文句が出ないように頑張ってくれた13回卒の諸君の存在があって初めて、15回卒の諸君(特に今回の会の企画運営に当たってくれた二人)は自由気ままな行動をすることが出来たのかも知れない。私が、13回卒の諸君は立派だがそれだけではいけないのかもと考え始めた頃に、15回卒の諸君が石を投げ込んでくれたのかも知れない。

なにはともあれ、今回集まった諸君には卒業以来の再会だという場合もある。50年以上

昔の仲間である。だがすぐに高校時代の仲間に戻ることができるらしい。活発な会話が飛び交う。

当時のリーダー西村くんの挨拶があって宴が始まる。私の米寿を祝う会と説明があったが、私に挨拶をするようにとの声はかけられなかった。ここキングサーモンでは私はいつも”その他大勢の中の一人”にしてもらっているのだ。昔の顧問としての扱いは嫌だと主張してきている。その習慣を守ってくれたのだ。

私にだけではなく、ワIFEにもベストを！
にもかかわらず、特別扱いで米寿の祝として私はダウンのベストを受け取ってしまった。その御礼すら言わずに済ませてしまった。申し訳ないことでもあり、ありがたいことでもある。このベストを着て雪の山を歩け！という意味ではなくて、ベストを着て温かい炬燵に丸くなってしがみついてくださいという意味だろうと考えて、現在毎日”拳拳服膺（ケンケンフクヨウ 胸中に銘記し忘れずに守ること <中庸>、教育勅語の末節にある言葉）”しているところだ。ありがとう。

50年前に登った山の話になると記憶の食い違いも出てくる。彼らにしてみてもそろそろ80歳に手が届きそうな年代である。過去の記憶を頭の中から引っ張り出して楽しみ、それを頭脳の棚にしまい直すときには上手に自分に都合のいいように美化して格納し直してもいい年齢である。だがどうやらまだそこまでは行ってないらしい。記憶の食い違いを正し合うのは楽しい作業である。私自身は、昨日のことは忘れても若い頃のことは鮮明に思い出すことができる歳になっているはずだが、実はその両方とも忘却の彼方に飛んでしまっている。思い出すことができるのは断片的な場面だけである。当時の山登りの記録が残っていれば楽しいだろうと思うが、生来の逆記録魔はどうしようもない。

会話の中では、50年の間に培った知識や信念が吐露されることもある。そんなやり取りを聞いていると彼らの（汚い流行り言葉で言えば）イキザマが偲ばれて嬉しくなる。

彼らにとっては勿論のこと、私にとっても貴重な時間が流れていた。キングサーモンの福島くん、そして奥さんのサービスが心に染み込むのは毎度のことである。今年の5月、ふたりとも入院生活を送ったばかりであり、ご夫婦の体調を気にしなければいけないと思いつつ、すっかり甘えてしまった。

考えてみればこの歳まで、私がさほどボケもせず暮らすことが出来ているのはこの日の集まり場所、キングサーモンがあったおかげかもしれない。年齢をとっていよいよ引きこもりがちになっている私を山歩きと会話の絶えない宴席に引っ張り出してくれたのはこの日に集まってくれた連中、特に福島・西村・百瀬・藤松の近間に住む諸君であり、楽しみの場所を提供してくれたキングサーモンであり、明るく出迎えてくれた福島君と奥さんの瑛子さんである。15回卒には山岳部以外にも大勢の諸君の世話になっている。有難いことである。場違いの謝辞かもしれないが、このことも書き添えたくなった。

< 2020.01.20 記 >

なんとかもっとマシな文章にならないかと思いつつ日が経ってしまった。

六人の諸君に対する謝辞を書き連ねるつもりだったのだが、日にちをおいてみても名文が出てきそうもないのでこのまま送ることにした。

天候と政治の異常は私が息をしている間には治りそうもない。

若い人たちにおまかせすることにしました。

健康に気をつけながら頑張ってください。

2020.01.31 小野朋士